

2つの顔を持つ物語

——「タール博士とフェザー教授の療法」の読者について——

平 野 幸 彦

19世紀前半のアメリカ文壇で八面六臂の活躍をしたエドガー・アラン・ポー Edgar Allan Poe (1809-49) が1844年5月28日以前に脱稿し⁽¹⁾、かつての職場であるフィラデルフィアの『グレアムズ・マガジン』編集部にゆだねるも1年半もの間放置され、1845年11月号にようやく掲載された「タール博士とフェザー教授の療法」“The System of Doctor Tarr and Professor Fether” (以下「タールとフェザー」と略す) は、全体にユーモラスな雰囲気を醸し出しながら、奇妙な——むしろ不吉な、と言うべきかもしれない——読後感を残す作品である⁽²⁾。

18年の秋、フランスの極南地方を馬に乗って旅していた「わたし」は、パリでうわさに聞いていた精神病院の近くを通りかかり、めったにない機会だから訪問したいと願う。数日前にふと知り合いになった同行の紳士にその旨を話すと、なにより急ぎの旅だし、それに狂人を見ると怖気を震うので自分は遠慮するが、院長のメイヤール氏 (Monsieur Maillard) とは面識があるので紹介してやると言う。そのようにして施設に招じ入れられた「わたし」は、まず、ピアノに向かいペリーニのオペラのアリアを歌う喪服の若い美女に出会う。患者を施設の中で自由に行動させる「鎮静療法」(the “system of soothing”) が実践されていると聞いていた「わたし」は、彼女もその1人でないかと疑い、院長に暗に尋ねると、彼はちがう、自分の姪だと答え、じつは数週間前からその治療法は行なわれていないのだと言って「わたし」を驚かす。しばらくして晩餐に招かれた「わたし」は、奇妙な連中と食卓を共にすることになる。総勢25ないし30人のうち、少なくとも3分の2が女性であるこれらの人々は、いっけん身分が高く生まれもよさそうだが、服装・言動ともにきわめて奇矯で、どう見ても狂人としか思えない。しかしその疑惑について院長に探りを入れても、彼

はもっぱら否定するばかり。そうこうするうちに建物のどこかから大きな叫び声が上がリ、それを聞いた一座の者たちはひどく狼狽する。その後しばらくどんちゃん騒ぎが続くが、やがて窓を押し破って「チンパンジーか、オランウータンか、はたまた喜望峰の巨大な黒いヒヒか」と見紛う一団が突入してくる。じつは彼らは狂人たちの付添人で、メイヤール——彼はたしかに2、3年前まではこの病院の院長だったのだが、自ら狂気に陥り、患者の身となっていた——に率いられた狂人たちによる暴動に遭い、タールを塗られたあと羽毛まみれにされ、地下房に閉じこめられていたのだった。

上記のあらすじを一瞥しただけでも、この作品が何かを諷刺しているらしいことは容易に見て取れるだろう。ウィリアム・ホイップルによれば、諷刺的的是2つあり、その1つは19世紀イギリスを代表する作家チャールズ・ディケンズ Charles Dickens (1812-70) である。ホイップルが提示する根拠はつぎのとおり。すなわち、1842年3月上旬、ポーは折からアメリカを旅行中のディケンズがフィラデルフィアに立ち寄ったのを機に、面会を申し入れた。その結果実現した2度の会見のさいに、おそらくポーは自著『グロテスクとアラベスクの物語』*Tales of the Grotesque and Arabesque* (1840) を再刊してくれるイギリスの出版社を探すよう依頼し、ディケンズも承諾したらしい。しかしあいにくこれは実現しなかった。そうこうするうちに後者の『アメリカ紀行』*American Notes for General Circulation* (1842) が出版される。そこにはボストンの精神病院訪問についての記述が含まれていた。その後しばらく経った1844年1月、イギリスの雑誌『フォーリン・クォーターリー・リビュー』誌上に、ルーファス・ウィルモット・グリズウォルド Rufus Wilmot Griswold 編のアンソロジー『アメリカの詩人と詩』*The Poets and Poetry of America* の書評が掲載される。この記事は詩人ポーをイギリスの同時代詩人テニソン Alfred Tennyson (1809-92) の模倣者だと非難するものだった。そして当然ながらひどく腹を立てたポーは、その匿名の論者をディケンズにちがいないと考えたのである⁽³⁾。以上のような経緯を考えると、書評がもたらした軋轢とほぼ同時期に脱稿した、精神病院を舞台とする物語のヒントになったのは『アメリカ紀行』であり、諷刺の対象はその著者ディケンズだという結論になる (Whipple 126-33)⁽⁴⁾。

ではポーはどのようにしてディケンズを揶揄しているのか。それは、諷刺の

照準を（『アメリカ紀行』におけるディケンズと同様）精神病院の訪問者、つまり語り手である「わたし」に合わせ、その彼を愚かしく描くことによってであるという。ホイップルは、語り手の愚鈍さを示す例を3つ——物語の冒頭に登場する同行の紳士が訪問先の精神病院から抜け出した患者であることを見抜けず、そのため狂気のメイヤール氏を院長だと信じこむはめになったこと、せっかく「姪」の瞳に狂人特有の落ちつかない輝きを見て取りながら、メイヤール氏の巧みなことばによってやすやすとごまかされてしまうこと、物語の結末を迎えてもなお、タール博士とフェザー教授の实在を信じていること——挙げている（125-26）。また、諷刺対象についての主張はホイップルと異なるが、バーナード・A・ドラバックも「わたし」の馬鹿さ加減を強調している。「ポーは読者に何度も何度も彼（語り手）を信用しないように警告する。その一方で、語り手に思慮分別があるとの印象を読者に与えようとさせることにより、誰を信ずべきかというゲームを複雑にしている。」「彼（語り手）はおのれの主張どおり人間だともう少しで読者を納得させそうになる」けれども、「彼の発言と行動が実物以上によく見える彼の自己イメージを裏切り、読者は代わりに洞察力の欠如を確信することになる。」要するに、語り手は「自分にまったく関係のない事柄における真偽を区別し得ないがために、愚かで信頼できない証人なのだ」（180）。

しかしはたして語り手である「わたし」は、それほど愚かしく描かれているだろうか。なるほどたしかに彼は、ポーの一連の探偵ものの主人公C・オギュスト・デュパンのように、頭脳明晰で知覚鋭敏な印象は与えない。とはいえ、私見では、物語全体を支配する、諷刺的でユーモラスな調子（トーン）——よりポーらしいことばを使えば「効果」——が要請する以上の愚者性は付与されていないように思われるのだ。たとえば、同行の紳士の正体を見抜けなかったとするホイップルの主張だが、これは説得力に乏しいと言わざるを得ない。結末の語り手のせりふ（「この事実〔狂人による病院の乗っ取り〕を、わたしを紹介してくれた旅の友は知らなかった」〔1021〕）を疑わなければならない根拠はテキストのどこにも見当たらないのだ。またメイヤール氏の「姪」に関して、狂気のしるしに感づきながら、あっさりごまかされてしまうのはたしかに間抜けと言えば間抜けだが、しかし結局その直観が正しかったことが判明するのだから、語り手は必ずしも完全なる愚者に造形されているとは言えないのではな

いか。さらにまた、晩餐会の場面で、会食者たちを目の当たりにしたときの彼の観察（「同席者全員の装いには、ひとことで言えば、奇妙なところがあった。そのため当初わたしは……メイヤール氏は夕食が終わるまでわたしをだましておいて、わたしが狂人と食卓を共にしていることを知って、食事の間に不快な気持ちを味わうことがないようにしているのだ、と考えた」[1008;傍点筆者])は事実としてはまちがっていないし、メイヤール氏との会話においていっけん愚鈍な印象を与えるのも、正真正銘の馬鹿だからというよりは、むしろ若者らしいおのれの知識に対する自信のなさ（彼はメイヤール氏に「あなたはまだお若いのですよ」と言って慰められる [1007]）と、斯界の権威（なにしろメイヤール氏は狂人の新療法の共同開発者なのだ）を前にしての気後れのために、じつは真実を見抜きかけているにもかかわらず（事実彼は何度も疑念をほめめかしている）、あえて心を決めることができないように思われる。しかも宴の後半以降では痛飲しているのだから、辻褄の合った思考や行動を示せなくとも無理なだろう。このように「わたし」は、必ずしも愚かさを強調されているわけでもなければ、「信頼できない語り手」でもない⁽⁵⁾。つまり諷刺のおもな対象ではなさそうなのだ。さらに言えば、結末に至る前に真相が公然とあからさまになってしまったら、それこそ話にならないだろう。ポーの場合にかぎらず、短篇小説について考えるさいには、逼真性 (verisimilitude) を重要視するあまり、プロットを展開するための構成上の要請を無視してしまうことはできない。その観点から判断すると、「タールとフェザー」の語り手は、血肉を備えた生身の人間というよりは、むしろ物語を進行させるための「仕掛け」にすぎないとすら言えそうである。

というわけで、「タールとフェザー」の諷刺対象は語り手ではなく、むしろ物語全体の構図の中に求めるべきだろう。先に引用したホイップルが指摘している、この作品のもう1つの諷刺的的とは「鎮静療法」それ自体である⁽⁶⁾。当時のアメリカでは、狂人の処遇をめぐる、この新手の療法を唱道する勢力と、従来の監禁療法を是とする勢力との間で、激しい論争が繰り広げられていた。そしてポーは、「文学以外の問題に直面したときの持ち前の保守性」を遺憾なく発揮して、鎮静療法を揶揄してみせたというわけだ (125)。しかしこれは、ホイップル自身も言うように、あまりに自明な解釈である。しかもポーのテクス

トには、再三言及されるがために意味なしとして看過することができない、ある要素が存在し、それは上記の解釈では説明されない。

その要素とは「南部」の強調である。本論冒頭の梗概にも記したように、物語の舞台は「フランスの極南地方 (the extreme Southern provinces of France)」である (1002)。また先に触れた、晩餐会の同席者の異様な出で立ちに語り手が疑念を覚えるくだり。引用した一節に引き続き、彼はつぎのように述べている。「南部の住民 (the southern provincialists) はとりわけ奇矯な人々で、古風な考えを山ほどいだいている、とパリで教えられていたことを思い出した」(1008)。さらにまた、食卓でいきなりニワトリの鳴き真似をした老婦人を始め、一座の人々の頭は少々いかれているのではないかと問いただした語り手に対し、メイヤー氏はこう答える。「『ここ南部では (here in the South), たしかに、人はあまり思慮深くはありません——あらかた好きなようにやる——人生とかそのたぐいのことをみな楽しんでいるのですよ——』」(1016)。しかもこの「南部」は、フランスのそれだと明言されているにもかかわらず、あるエピソードの存在により、アメリカのそれであることが強力に暗示されている。それは、幽閉されていた付添人たちの脱獄を告げる2度目の雄叫びを聞いて恐慌をきたした狂人の楽団が、「それまでひどく酩酊していて仕事などできそうになかったのに、いまや突然はね起き楽器を構え、舞台によじ登り、一斉に『ヤンキー・ドゥードゥル』を演奏し始めた」エピソードである (1020)。よく知られているように、「ヤンキー・ドゥードゥル」は独立戦争中のアメリカの流行歌だが、題名中の「ヤンキー」とは、通常「ニューイングランド地方の住民」、より広い意味では「米国北部諸州の人」あるいは「南北戦争当時の北軍の軍人」を表わす⁽⁷⁾。とすれば、なぜ「南部」人である狂人の楽団がおのれの危機にさいして「北部」の流行歌を演奏するのか、という疑問が生じるにせよ、この物語における「南部」がアメリカのそれを暗に指しているということは、かなりの説得力をもって主張できると言えよう⁽⁸⁾。

この点に着目して議論を展開したのは、筆者の知るかぎり、リチャード・P・ベントンをもって嚆矢とする。「南部をえこひいきし、ボストンやヤンキーに対して偏見をいだいていたポーはここで……南部人を変わっている——要するに気が狂っている——と考える北部人の鼻をびくつかせている。南部の習俗を、ピューリタンの遺産を背負った北部のそれよりも、思慮深さには欠けるが

快楽では勝るものとしてひけらかしているのだ。ヤンキーはお望みなら南部人を理性に欠けると考えてかまわないが、南部の生活は北部の暮らしよりも楽しいのである。」そして作中のバリは、北部文化の中枢たるボストンのことだとベントンは主張している（8）。

しかしながら、この解釈で足れりとすることを許さない、重要な要素の存在をベントンは見逃している。それは、表題における語呂合わせでも強調されているように、《タール・アンド・フェザー（羽毛）（tar and feather）》にはほかならない。

よく知られているように、《タール・アンド・フェザー》とは私刑の一種である。人の体一面に熱したタールを塗り、鳥の羽毛で覆った後、担ぎまわるといふ残酷なものだ。試みに文学作品を参照してみると、たとえばナサニエル・ホーソーン Nathaniel Hawthorne (1804-64) の短篇「ばくの親戚、モーリノー少佐」“My Kinsman, Major Molineux” (1832) では、失脚した為政者がこの憂き目にあっている（85）し、マーク・トウェイン Mark Twain (1835-1910) の代表作『ハックルベリー・フィンの冒険』 *Adventures of Huckleberry Finn* (1884) の中には、自称「王様」と「公爵」なるベテン師がこのやり方で懲らしめられるエピソードが見られる（290）。

このように《タール・アンド・フェザー》は、19世紀のアメリカではありふれた刑罰だった。しかし話はそれだけにとどまらない。というのも、この処刑法は、アメリカにおける奴隷制度をめぐる陰惨な歴史を強力に暗示する。つまり、逃亡奴隷にせよ奴隷制度廃止論者にせよ、この南部的な制度に逆らう者は、しばしばこの手で痛目にあわされたという事実があるからだ。たとえば、アーネスト・クロスビー著『無抵抗主義者ギャリソン』第2章によると、奴隷制度廃止運動の指導者であり、機関誌『解放者』 *The Liberator* の編集者でもあったウィリアム・ロイド・ギャリソン William Lloyd Garrison (1805-79) が、1833年、遊説先からボストンに戻ってきたとき、運動に反対する連中は事前にチラシを撒いて、大衆に「たっぷりのタールと羽毛で武装して」ギャリソンの事務所前に集まるように呼びかけた。また1835年10月に彼が暴徒に襲われたとき、『ニューイングランド・ギャラクシー』誌の編集者は、ある治安判事がつぎのように述べるのを耳にしたという。「彼らが奴〔ギャリソン〕を捕らえ、タールを塗って羽毛まみれにすることを願っている。わたしは手助けはしないけど、そ

れをやってくれる男に5ドル差し上げる用意がある。」

また、《タール・アンド・フェザー》された付添人の外見も注目に値する。「チンパンジーか、オランウータンか、はたまた喜望峰の巨大な黒いヒヒカ」(1021)。この記述は、私刑に用いられた羽毛の色が黒かったこと⁽⁹⁾だけでなく、暴動の結果、付添人たちが類人猿の地位にまで貶められたことを示している。そして類人猿というのは、当時の（とりわけ南部の）白人たちによる、ステロタイプ的な黒人のイメージの1つであった⁽¹⁰⁾。

「タールとフェザー」の批評史において、このようなアメリカ南部奴隷制度とのかかわりに最初に着目したのは、おそらくハリー・レヴィンの古典的名著『黒の力』(1958)だろう。彼が書いた手紙や記事のたぐいを読めば明らかなように、「不屈の奴隷制度支持者であって、黒人賛美者とは言いがたい」「ポーのかき乱された無意識の奥底には……憤りと人種的恐怖が存在していたにちがいない。これらの衝動が彼の著作の表面に姿を現わすことはめったにないが、彼の滑稽ものの一篇『タール博士とフェザー教授の療法』は意識下に秘めたるものを暴こうとしている(have its subliminal revelations to disclose)。……それはあたかもポーがああしつこく付きまとう疑問、すなわち、奴隷たちが奴隷制度にうんざりして、主人たちの所有権を剥奪したら、何が起こるだろうか、という疑問を発しているようだ」(120-23)⁽¹¹⁾。

そしてこのレヴィンの鋭い洞察をより精緻かつシステムティックに推し進めたのがバーナード・A・ドラベックの議論である。彼の所説のポイントは、「タールとフェザー」の中で「ポーは、彼の小説には珍しく、奴隷制度の問題についてコメントしており、とりわけ奴隷制度廃止論者がもたらす南部への脅威に焦点を合わせている」ということだ(177)。より具体的に言うと、「ポーは反乱の可能性を増すばかりか、その発生を確実にするという理由のために、奴隷制度の運営における『鎮静療法』を嘲笑している。そして付随して、奴隷の漸進的解放を狂人のように主張することにより、そのような惨事を招くであろう連中を、人の言いなりの出しゃばり屋にしろ自ら進んで活動する奴隷制度廃止論者にしろ、卑しむべき輩としてあざけている。」つまりポーは、語り手である「わたし」を「まるで理解できない状況に入りこんでしまった、無知で差し出がましい北部人」に、院長のメイヤール氏を「常軌を逸した奴隷制度廃止論者、南部の制度／施設・institution)に収容されている者(inmates)の側につき、事

実上彼らの一員となる狂信者」に、そして狂人たちを「奴隸、手に入れた自由によりその最悪の衝動が解き放たれた哀れな連中」にそれぞれなぞらえて揶揄することにより、奴隸を甘やかし過度の自由を容認するやり方をよしとしがちな時代の趨勢に対する警鐘を鳴らしているというわけだ (181)。したがって、この物語は「寓話であり、その教訓は、反乱集団に権力を与えようとする革命的傾向に対して現状を守るようにと南部に警告することである」という結論が導かれる (180)⁽¹²⁾。

ドラベックの議論はかなり説得力のあるものだが、問題がないわけではない。たとえば、彼は作中に散見される解釈上の難点（「直線的なアプローチ」「物語の輪郭しか吟味せず、登場人物やできごとを見た目のまま受け入れる分析」では解消されない「矛盾する要素」⁽¹³⁾）を、もっぱら「わたし」の語り手としての資質（「愚かで信頼できない証人」）に帰している（179-80）が、これは先述したように、容易には首肯できない主張だ。また「頭のあらずじに記したように、物語の結末では、〈タール・アンド・フェザー〉されてから地下房に幽閉され、水責めに遭っていた付添人たちが脱出に成功して反革命を起こすのだが、そのエピソードの意味がドラベックの説ではいまひとつ明らかにされない。この作品の主要なメッセージが南部人に対する警鐘であるならば、なぜ秩序を回復させる、つまりハッピーエンドにするのか。しかも原状に復帰したのち、この病院では「鎮静療法」が「重要な修正を加えられて」再開される（1021）のだが、その含意も不明である。おまけにポーは語り手に、「にもかかわらず、わたしは、自身の『治療法』はその種のものではとても優れているとのメイヤール氏の意見に同意せざるを得ない。彼がいみじくも言ったように、それは『単純で——整然としていて——なんの面倒も起こさない——ちっとも』」なる感想を述べさせたあげく、「タール博士とフェザー教授の著作を求めて、ヨーロッパのあらゆる図書館を探索」させる（1021-22）。このくだりは、さしたる意味はないとして読み飛ばしてしまうには、あまりに暗示的だと言えよう。

はたしてこの謎はいかに解くべきだろうか。そのための手がかりとして、筆者はこの短篇の発表媒体に注目したい。先述したように、この作品が初めて公にされたのは、かつてポー自身も編集者をつとめていた『グレアムズ・マガジン』である。そしてこの雑誌の発行所はペンシルヴェニア州フィラデルフィア

にあった。したがって、ポーの読者には南部人のみならず、北部人も含まれていたはずだ。否、むしろ後者のほうが多かったにちがいない⁽¹⁴⁾。ならば、北部の読者に対する物語の「効果」にも、(南部の大義を公然と支持・擁護する『サザン・リテラリー・メッセンジャー』誌に掲載する場合とはちがって、)ポーは無関心ではいられなかつたろう。

北部の(それも奴隷制度廃止論に共感をいだく)読者の視点から見た場合、「タールとフェザー」はどのように目に映りうるだろうか。ここで再浮上してくるのが、先に注で言及した、ドラベックの放棄した解釈——「南部に、奴隷の扱いにおいて思いやりのある方策を採る必要があることを示し、黒人のある種の扱いを特徴づけている監禁と残虐という方法に内在する危険を表わしている」(179)——である。つまり、狂気に陥った院長と狂人の仲間たちは(作中に何度もほのめかされているように)南部人にほかならず、彼らはやがて非人間的な仕打ちをしてきた黒人(「黒いヒビ」)たちによる暴動に遭い、その後は北部の奴隷制度廃止論者が主張するような人間らしい扱い(「鎮静療法」)が再開されるだろう、という予言的解釈である(「再開」とされているのは、現状は本来的状態からの逸脱であることを暗示していると解せようか)。そしてこの読みの枠組みの中では、語り手がタール博士とフェザー教授の著作を探し求めてついに見つけられないでいるのは、そのような残虐な奴隷管理法が虚妄にすぎないことをほのめかしていると解釈できるだろう。

もちろんこれは不満足な解釈である。反革命や「鎮静療法」に帰着することの意味は合点がいくにせよ、ドラベックの指摘した問題点は依然解消されていない。それに、再開された「鎮静療法」についても、「重要な修正を加えられて」というくだりは、むしろドラベックの提示したような、南部の奴隷制度擁護論者に好都合な解釈を指向している。とはいえ、彼の理論にも問題があることは、すでに述べたとおりだ。要するに、ドラベック流に南部の奴隷制度擁護論者の視点から読もうと、その読み方では説明されない疑問点を解消すべく、北部の奴隷制度廃止論者の視点から読もうと、程度の差はあれ、矛盾点は残されてしまうのである⁽¹⁵⁾。

それではいずれの解釈も誤りなのだろうか。筆者はそうは思わない。事実はおそらくつぎのようであるだろう。すなわち、「タールとフェザー」は、読者に

応じて、(少なくとも) 2つの異なる顔を見せる物語なのである。そしていずれの解釈にも完全に決着することがない。それは先述したように、相反する政治的主張を奉ずる読者群を共に相手にしなければならなかった結果なのである。

ドラベックが指摘するように、この物語の執筆に先立つ(あるいはベントン説に依拠するならば、執筆がなされた) 1830年代の南部では、黒人奴隷による反乱への恐怖が最高潮に達していた(177-78)。そして「南部貴族」を自認していたポーは、情況証拠から判断するに、おそらく奴隷制度を擁護する側についていただろう。その意味で、ドラベックが提示した解釈に見られるようなメッセージは、ポーの真意だったかもしれない。しかしながらプロの作家として、つねに読者の存在を意識していたポーにとって、当時の彼の読者のおそらく大半を占めていたであろう北部人を度外視することは、とてもできない相談だった。そこで、かりにかの地の慧眼の持ち主がこの物語のテーマ——南部奴隷制度についての寓話——を正しく読み取ったとしても、気分を害させないですむような工夫をしたのである。「ポーは、民主主義の原則に対する深い不信の念が奴隷制度や奴隷制度廃止論者の問題に伴う煽動的な出来事によって膨張させられたときには、必ずしもすべての読者の好みに合わなくとも、おのれの意見を力強く述べることができた」とドラベックは述べている(183)が、彼はそんなナイーブな作家ではない。彼はちゃんとすべての読者に気を配っていたのだ。上述した解釈上の曖昧さや矛盾点こそが、その苦心の跡にはかならない。

注

- (1) リチャード・P・ベントンは、じつはポーは「タールとフェザー」を(ナサニエル・パーカー・ウィリス Nathaniel Parker Willis を諷刺したとされる「名士の群れ」“Lionizing”と同時期の) 1834年から36年の間にすでに書き上げており、1842年のチャールズ・ディケンズ著『アメリカ紀行』の出版後アメリカで上がった批判の声に刺激されて発表したのではないかと推測している(9)。
- (2) 「タールとフェザー」からの引用、およびテキストに関する情報はマボット版による(日本語は拙訳。強調は特記しないかぎりポー)。
- (3) ポーの知人のジェームズ・ラッセル・ローエル James Russell Lowell は、書評の筆者を、ディケンズの友人で記事が掲載された雑誌の編集者ジョン・フォースター John Forsterであると考えていた(Whipple 131)。
- (4) ベントンはホイップルの説に反論して、「タールとフェザー」におけるそもそも

の諷刺的的はN・P・ウィリスであり、ポーはウィリスの短篇「パレルモの癡狂院」"The Madhouse of Palermo" (1834) に取材したのだと主張している。

- (5) デーヴィッド・ケタラーにいたっては、語り手は見学者ではなく入院患者つまり狂人だとまで断じている(100)が、さらに根拠薄弱なのは言うまでもない。
- (6) 専門家の間ではむしろ「精神的療法」"Moral Treatment" と呼ばれていたこの狂人治療のメソッドは、もともとフランスの精神科医フィリップ・ピネル Philippe Pinel とイギリスのクエーカーの博愛主義者ウィリアム・テューク William Tuke が1792年にそれぞれ自国で始めたもので、従来の懲罰や監禁主体のやり方に対し、医師や付添人の監督下、患者に相当の行動の自由を許容する。アメリカには1800年代初めに導入され、いくつかの病院がこれを採用したが、そのうちペンシルヴェニア州フラン克福ードとニューヨーク州ブルーミンデルの精神病院の医師をつとめたプリニー・アール Pliny Earle とポーとは文筆上の交友関係にあった。ために、「鎮静療法」についての後者の知識は前者から得られたとおほしい(Whipple 122-25)。なお、19世紀のアメリカにおける狂気概念および精神病院建設については橋本を参照。
- (7) このことばはアメリカ人全般を指すこともあるが、その場合は外国人が用いる軽蔑的な呼称なので、ここでは当てはまらない。
- (8) にもかかわらず、アメリカ南部という含意をあえて度外視する解釈も存在する。たとえばジュリアン・シモンズは、「当時イギリスとアメリカの両方で進行中だった、囚人の扱いにおける『沈黙法 (silent system)』〔囚人をいっしょに働かせるがしゃべることは許さないやり方〕と『分離法 (separate system)』〔囚人どうしを完全に別々にしておくやり方〕を主張する者の間の論争」をポーは念頭に置いていたのかもしれないと述べている。そして物語の舞台がフランスであることについては、「おそらくより異国情緒豊かにするためであったろうが、アメリカの制度に言及していると受け取られかねない危険を感じたからにちがいない」と推測している(312)。またデーヴィッド・ヴァン・リアの解釈も、基本的にシモンズと同様の観点を採用している。「『タールとフェザー』の」時代設定「〔18-年の秋〕」は、アメリカとフランス両国で大革命以後広範に及んだ監獄改革を指している(335)。物語の表面に現われているテーマからして、このような議論の妥当性は当然認められなければならないが、拙論では「南部」への言及、および(後述する)《タール・アンド・フェザー》の存在を重視したい。
- (9) スティーヴン・バイスマンの指摘によれば、大半のヒヒの体毛は黄色みがかった色か茶色で、しかも喜望峰近辺には生息していないという(447)。
- (10) この点については、巽195頁以降を参照。
- (11) ポーが奴隷制度を擁護していたか否かという問題は、過去何十年にわたって激しい議論的になってきた。そのさいとくに注目されてきたのは、いわゆる「ポー

ルディング＝ドレートン書評」(James Kirke Paulding 著 *Slavery in the United States* と匿名の〔通例 William Drayton 著とされている〕*The South Vindicated from the Treason and Fanaticism of the Northern Abolitionists* を合わせて書評した、奴隷制度を肯定する記事で、ポーが編集に参加した雑誌『サザン・リテラリー・メッセンジャー』の1836年4月号に掲載された)が、はたしてポーの筆になるものかどうかという点である(当時の書評記事は無署名で発表されるのがつねだった)。しかし筆者は、この問題についての検討は別の機会に譲り、差し当たりドラベックのつぎの見解に同意しておきたい。「この書評の著者がポーであろうとなかろうと、彼が南部への忠誠を公言していた事実に鑑みて、南部のものの見方を共有していたと考えてよいだろう」(178)

- (12) 先に言及した、カタストロフィの場面で狂人の楽団が「ヤンキー・ドゥードゥル」を演奏する行為は、ドラベックの解釈の枠組みの中では、「哀れな詐称者たち〔本来自分のものでない権力を手にした奴隷たち〕が結束した唯一の行動」ということになる(181)。
- (13) かりに「タールとフェザー」の中に「南部に対する警告」を見いだせる、つまりこの物語が「南部に、奴隷の扱いにおいて思いやりのある方策を採る必要があることを示し、黒人のある種の扱いを特徴づけている監禁と残虐という方法に内在する危険を表わしている」としたら、狂人による反乱や狂人の奇行を長々と描写するくだりや語り手と院長のちぐはぐな会話といった要素の意味を理解することができなくなるとドラベックは主張する。またそれとは正反対の解釈、つまりこの物語を「奴隷を甘やかす、『鎮静療法』によって体制を転覆させる手段を彼らに与える連中への批判」として読むとしても、狂人を同情的に描いたり、院長を分別のある礼儀正しい人物として提示したり、語り手が結末に至ってもなお院長と彼の発明した方法のいずれも称賛したりすることの意味や、付添人が南部のプランテーション所有者や監督を表わし、結末に復帰するのはおのれの正当な所有物を回復するためにすぎないのなら、なぜ「黒いヒビ」と呼ばれるのかといった謎が解決されないという(179-80)。もっともドラベックは、語り手のことばを文字どおりに受け取る「直線的なアプローチ」を排することにより、結局後者の解釈を採用することになるのだが。
- (14) ちなみに、『グレアムズ・マガジン』の寄稿者には、ブライアント William Cullen Bryant (1794-1878) やホイットティア John Greenleaf Whittier (1807-92) のような北部の奴隷制度廃止論者も、シムズ William Gilmore Simms (1806-70) やチヴァーズ Thomas Holley Chivers (1809-58) のような南部人も含まれていた(Chielens 157) ことから、この雑誌の中立的性格がうかがわれる。また、アルフ・ブラットによると、同誌の発行人兼編集者のジョージ・グレアム George Rex Graham (1813-94) は、「『タールとフェザー』の掲載時には」文学的内容に重点を置いていたの

で、時事的な問題や物議をかもし問題は避けていた」(155)。

- (15) もっとも、結末のエピソード(語り手によるヨーロッパ中の図書館探索)については、ポーは見事矛盾を解消しおおせているように思われる。北部側の視点からの読みでは、先述したように、このエピソードは残酷な奴隷管理法の不在を示す。ところが南部の視点に立つと、反対に、その存在を逆説的に主張することになるのだ。たとえばハリー・レヴィン(123)やヨッヘン・アヒレス(366)は、実在しないのではなく、アメリカ産のシステムだからヨーロッパの図書館には見つからないのだと主張している。しかもこの解釈は、直前の語り手のくだんの治療法を称揚するせりふによっても裏書きされるだろう。

引用文献

- Jochen Achilles, "Edgar Allan Poe's Melting Pot: Skeptical Soundings of Cultural Composition." *Anglia* 115.3 (1997): 352-74
- Richard P. Benton, "Poe's 'The System of Dr. Tarr and Prof. Fether': Dickens or Willis?" *Poe Newsletter* 1 (1968): 7-9
- Edward E. Chielens (ed.), *American Literary Magazines: The Eighteenth and Nineteenth Centuries* (New York: Greenwood P, 1986)
- Ernest Crosby, *Garrison the Non-Resistant* (1905; BoondocksNet Edition [<http://www.boondocksnet.com/editions/garrison/>], 2000)
- Bernard A. Drabeck, "'Tarr and Fether': Poe and Abolitionism." *American Transcendental Quarterly* 13 (1972): 177-84
- Nathaniel Hawthorne, *Tales and Sketches*. Ed. Roy Harvey Pearce (New York: Literary Classics of the United States, 1982)
- David Ketterer, *The Rationale of Deception in Poe* (Baton Rouge: Louisiana State UP, 1979)
- Harry Levin, *The Power of Blackness: Hawthorne Poe Melville* (1958; Athens: Ohio UP, 1980)
- Thomas Ollive Mabbott (ed.), *Collected Works of Edgar Allan Poe*. Vol. 3. Tales and Sketches 1843-1849 (Cambridge, Mass.: Belknap P of Harvard UP, 1978)
- Stephen Peithman, *The Annotated Tales of Edgar Allan Poe* (New York: Doubleday, 1981)
- Alf Pratte, "George Rex Graham." Sam G. Riley (ed.), *American Magazine Journalists, 1741-1850*. Vol. 73 of *Dictionary of Literary Biography* (Detroit: Gale Research, 1988), 153-58.
- Julian Symons (ed.), *Edgar Allan Poe: Selected Tales* (Oxford: Oxford UP, 1980)
- Mark Twain, *Adventures of Huckleberry Finn*. Ed. Walter Blair et al. (Berkeley: U of

California P, 1985)

David Van Leer (ed.), *Edgar Allan Poe: Selected Tales* (Oxford: Oxford UP, 1998)

William Whipple, "Poe's Two-Edged Satiric Tales." *Nineteenth-Century Fiction* 9 (1954): 121-33

巽孝之【ニュー・アメリカニズム 米文学思想史の物語学】(清土社, 1995)

橋本安央「狂気の鏡——『詐欺師』と19世紀アメリカの精神医学」, 『Sky-Hawk』13 (1997), 9-26頁